

## 6 大隅の甲殻類相

### (1) 概 要

淡水域および汽水域を含めたいわゆる“陸水域”に生息する甲殻類は、おもにテナガエビ類、ヌマエビ類、ザリガニ類、サワガニ類、およびイワガニ類に属している。鹿児島県の陸水産甲殻類に関する研究は瓜田（1921）に始まるが、その研究では種名リストが上げられているだけで、その生息分布の詳細は報告されていない。その後、久保（1936）、上田（1970）、諸喜田（1975、1979）がエビ類の生息分布を、Minei（1973）がカニ類の生息分布調査を行ったが、調査対象地域は種子島・屋久島以南の島々が主で、県本土では北薩地方がわずかに調査された程度である。

このように大隅地域は陸水産甲殻類研究の空白地域であったが、最近になって鈴木・津田（1991）、鹿児島県立博物館（1992）、Suzuki *et al.*（1993）、鈴木・佐藤（1994）およびSuzuki & Tsuda（1994）がその空白状態を埋めるように精力的に調査研究をした。これらの研究により、本地区の陸水産コエビ類（テナガエビ類とヌマエビ類の総称）相は薩摩半島のコエビ類相と類似するが、薩摩半島より若干南方系種が多く分布することが明らかになった。一方、純淡水産のサワガニ類相については、日本に広く分布するサワガニに加え、大隅半島固有種の生息が確認され、またサワガニにおける興味深い分布が明らかにされた。

このように本地区の陸水産甲殻類相が近接する薩摩半島のそれと若干異なるのは、それぞれの半島の地史的形成過程が異なっていること、および各種生物の生活史の違いが、総合的に影響した結果と考えられる。生活史の中でも特に幼生の生活形や発育条件は大きく影響すると考えられる。

次に既報の文献を参考に、大隅地区に出現する陸水産甲殻類の分布状況および幼生の生活形について各科ごとに概説する。

#### ① ヌマエビ科

本地区には、7種類のヌマエビ類が生息しているが、オニヌマエビ（口絵参照）、トゲナシヌマエビ、ヒメヌマエビの3種は西太平洋に広く分布する種類である。また、ヌマエビ（口絵参照）とミナミヌマエビ（写真-1）は日本固有種で、ミゾレヌマエビとヤマトヌマエビは東アジア地域に分布する種である。このうち南方系種のオニヌマエビは内之浦町広瀬川でその生息が確認され、現在のところ本地区がオニヌマエビの分布北限と考えられる。一方、ミナミヌマエビは肝属川および鹿屋市内の池で生息が確認され、本種の分布の南限は薩摩半島および大隅半島と考えられる。

ところで、ミナミヌマエビを除く他の6種は、基本的に幼生が海水中でないと発育できない両側回遊種（一部の地域では淡水域で生活史を完結しているヌマエビもいる）であるが、ミナミヌマエビは幼生も淡水で生育する純淡水種である。この点を考慮すると、オニヌマエビが本地区まで分布を拡げているのは、大隅

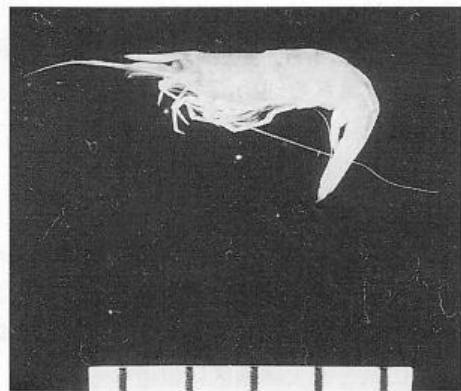


写真-1 ミナミヌマエビ

半島南東部が黒潮の影響を強く受けて、比較的亜熱帯気候に類似しているためと考えられる。これはヘゴの自生が見られることでも類推される。一方、純淡水産のミナミヌマエビの分布が本地区で終わっているのは、ミナミヌマエビの南進（分布域を気象や海象、地形の変動に合わせて南へ拡げること）が、大隅海峡が形成されたあとに起こったためと考えられる。

## ② テナガエビ科

大隅地区には、スジエビ（口絵参照）、テナガエビ（写真-2）、ミナミテナガエビ、ヒラテナガエビ、コンジテナガエビ、コツノテナガエビ（口絵参照）の6種の生息が知られている。しかしながら、河口汽水域の詳細な調査がされていないので、スジエビモドキなどの小型テナガエビ類の生息については不明である。

スジエビは鹿児島以北の日本各地、韓国、樺太、択捉島までの地域に分布しており、テナガエビ、ミナミテナガエビ、およびヒラテナガエビの3種は日本から台湾にかけて東アジアの地域に分布する。一方、コンジテナガエビとコツノテナガエビは広くインド-西太平洋に分布する南方系の種で、これら2種の分布北限は今のところ本地区といえるが、その生息数は非常に少なくまれな種と考えられる。

本地区に出現するテナガエビ類のうち、スジエビは淡水域に主として生息するが、まれに汽水域にも出現し純淡水種と言えるかどうかまだ問題がある。また、その分布の南限は屋久島で、先に述べたミナミヌマエビよりも南にある。これは本種の南進がトカラ海峡形成後大隅海峡形成前にあったことを類推させる。他の5種は基本的に両側回遊種と思われ、幼生は海水がないと発育できないようである。ただし、一部の地域では陸封されたテナガエビが報告されている。

## ③ アメリカザリガニ科

アメリカザリガニ（写真-3）は1926年に初めて日本（鎌倉市）に移入され、その後旺盛な繁殖力でその分布を拡大し、鹿児島県には1960年以降に入ってきたようである。大隅地区では肝属川水系にアメリカザリガニ1種が生息しているが、その生息数は現在のところ少ない。本種は低地の溝、用水路、水深が浅い止水を好み、流れの速い清水には生息しない。しかし子どもは底生生活に適した令期で孵化するので、近い将来その分布を拡大することが懸念される。

## ④ サワガニ科

大隅地区に生息するサワガニ類は、従来サワガニ1種とされていた。しかし、1994年にミカゲサワガニ（口絵参照）が新種として発表され、本地区には2種のサワガニ類が生息していることが明らかになった。ミカゲサワガニは大隅地区に固有の種で、しかも垂水市と鹿屋市にまたがる高隈山系と南大隅地区に位置する国見山・稲尾岳山系にのみ分布が限られている。全体に体色は茶色を示しているが、ハサミの部分が白いのが生きていたときの特徴の一つである（口絵参照）。

一方、サワガニにおいても大隅地区には興味深い現象が見られる。従来から、サワガニには色

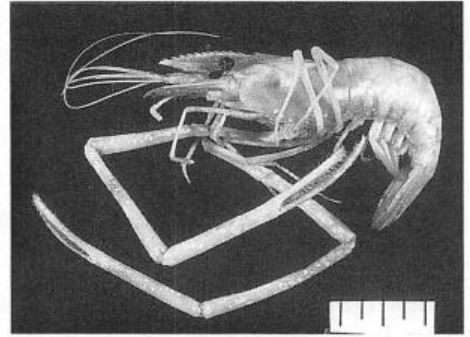


写真-2 テナガエビ

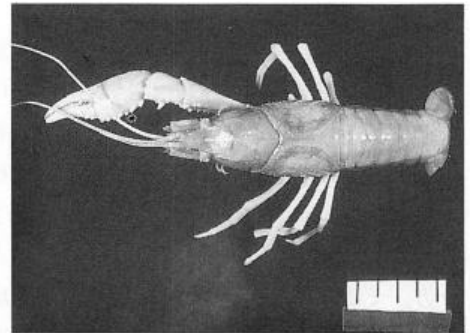


写真-3 アメリカザリガニ

彩変異があることが知られており、甲らや足が赤色もしくは赤褐色を示すものと（口絵参照）、脚やハサミは乳白色で甲らが青色を示すものがある（口絵参照）。大隅半島ではこの2つの色彩型が肝属川水系を境にして、北大隅地区（財部町、末吉町、福山町、大隅町、松山町、垂水市、輝北町、有明町、志布志町、鹿屋市の北部、大崎町、串良町、東串良町）には赤色系のサワガニが分布し、南大隅地区（鹿屋市の南部、高山町、内之浦町、吾平町、大根占町、根占町、田代町、佐多町）には青色系のサワガニが分布している。この色彩の違いがどのようにしておき、また遺伝的にどのような関係にあるのかは未だ明らかにされていない。

固有種のみカゲサワガニが生息し、かつ色彩の異なるサワガニがきれいにその分布域をわけている大隅地区は、サワガニ類の種分化を研究するには格好の場所と考えられる。

#### ⑤ イワガニ科

現在まで大隅地区で報告されている陸水産イワガニ類は、モクズガニおよびオオヒライソガニの2種であるが、河口の汽水域を調査すればヒライソガニ、ケフサイソガニ、クロベンケイガニ、アカテガニ、ベンケイガニ、フタバカクガニ、アシハラガニなどの生息も確認されるであろう。モクズガニとオオヒライソガニは淡水域と海水域を行き来する両側回遊種で、他の種は河口汽水域から淡水域あるいは陸上部にも生息する種類である。本地区に出現するイワガニ類は、ほとんどが西太平洋や東アジア地域に広く分布する種である。

#### ⑥ オカヤドカリ科

本科に属するオカヤドカリ類は“陸水産”の甲殻類ではないが、国指定の天然記念物でもあり、大隅地区の特徴の1つでもあるのでここに記述する。オカヤドカリ類は昭和45年に国の天然記念物に指定された。その後鹿児島県の南西諸島に生息することが明らかになり、昭和61年に鹿児島県で実態調査が行われた。その折り、佐多町尾波瀬、田尻、早崎および枇榔島においてその生息が確認された。おそらく日本固有種のムラサキオカヤドカリと思われるが、その生息数や繁殖の有無は不明である。しかし琉球列島に多い本種が佐多町に生息しているのも、先に述べたように、本地区が黒潮流の影響により温暖な気候になっているからと思われる。

#### 参考文献

- 鹿児島県立博物館 1992：調べよう鹿児島の自然（第5号）。鹿児島県立博物館 鹿児島市  
上田常一 1970：日本淡水エビ類の研究。園山書店 松江市  
久保伊津男 1936：鹿児島県湯田川に産するヤマトテナガエビに就て。養殖会誌 第6巻 第6号 122-123  
Minei, H. 1973：Potamoid crabs of the Ryukyu Islands, with descriptions of five new species (Crustacea, Decapoda, Potamoidea). Journal of Faculty of Agriculture, Kyushu University, No.17 203-226  
諸喜田茂充 1975：琉球列島の陸水産エビ類の分布と種分化について－I。琉球大学理学部紀要（理学篇） 第18号 115-136  
諸喜田茂充 1979：琉球列島の陸水産エビ類の分布と種分化について－II。琉球大学理工学部紀要 第28号 193-278  
諸喜田茂充 1989：奄美大島の陸水産エビ類相と分布。昭和63年度奄美大島調査報告書 267-275 環境庁  
鈴木廣志・津田英治 1991：鹿児島県におけるサワガニの体色変異とその分布。日本ベントス学

会誌 第41巻 37-46

Suzuki, H., Tanigawa, N., Nagatomo, T., & Tsuda, E. 1993 : Distribution of freshwater caridean shrimps and prawns (Atyidae and Palaemonidae) from Southern Kyushu and adjacent islands, Kagoshima Prefecture, Japan. *Crustacean Research* 22 55-64

鈴木廣志・佐藤正典 1994 : かがしま自然ガイド 淡水産のエビとカニ 西日本新聞社 福岡市

Suzuki, H. & Tsuda, E. 1994 : A new freshwater crab of the genus *Geothelphusa* (Crustacea : Decapoda : Brachyura : Potamidae) from Kagoshima Prefecture, Southern Kyushu, Japan. *Proceedings of the Biological Society of Washington* 107(2) 318-324

瓜田友衛 1921 : 鹿児島県に産する蝦類及其分布に就いて *動物学雑誌* 第393号 20-26

(執筆者 : 鈴木廣志)

## 7 大隅の昆虫相

はじめに

大隅地方（曾於郡・肝属郡）における昆虫類の調査は、1920年佐多町のツマベニチョウの記録や高隈山のチョウについて1942年の報文があるものの、本格的には戦後に開始された。1950年代に曾於郡中南部の低地帯は、志布志高校生物部およびそれから誕生した大隅昆虫同好会（のち鹿児島昆虫同好会）会員による調査がなされ、以後も記録の集積が続いて今日に至っている。佐多岬一帯は1949年朝比奈正二郎がツマベニチョウを再確認し、1952年の江崎悌三ほか5名による調査記録が発表されるに及んで“日本の台湾”として有名になり、1950年代後半から1960年代前半にかけて全国の研究者・愛好家の来訪が盛んで、かなり徹底した調査が行われた。しかしこのような南方指向はその後、屋久島や奄美諸島へと移り、佐多岬の観光地化もあって、調査熱はさめていった。高隈山の1942年頃の記録は福岡中学修猷館の生物部誌などに報告が出ているが、疑問種が多すぎて記録としては取り上げられない。その後1957～1963年に福田（筆者）は高隈山・鹿屋市・佐多町などを調査し多数の報文を出し、鹿児島大学生物研究会のメンバーも会誌「LEBE N」にいくらか記録を残している。鹿屋市には1993年から大隅虫の会も結成され、新しい記録が集積され始めた。

さらにこの間、近年各種開発や森林保全あるいは公園化のためのアセスメント調査が、志布志湾沿岸、稲尾岳などを中心になされた。しかし、いずれも昆虫相の全般に及ぶものではなく、その全貌が明らかにならぬまま、多くの興味ある森林が失われてしまった。それでも、残された断片的な自然（照葉樹林）での調査は愛好者によって続行されており、注目すべき発見が相次いでいる。これらによりとくに肝属山地は南方系昆虫の北限地として重要なことは言うまでもなく、多くの分布南限種の生息地として、さらにまた日南山地や高隈山との関わりのほか、屋久島とも関連づけて見直す必要にせまられている。

### (1) 昆虫相の概要

本地域の大部分は笠野原平地を中心とする耕作地帯で、昆虫相としてはいわゆる人里昆虫を主体としているが、西に高隈山、東に日南山地、南に肝属山地から佐多岬にかけての森林地帯があり、多くの森林性あるいは溪流性昆虫が生息している。また、低地に点在する湖沼にも注目すべき昆虫が少なくない。現在の知見から昆虫相の特色をまとめると次のようになる。

- a) 分布南限種が多い。大隅半島は生物地理学上の旧北区の南縁に近く、ここを南限とする種はきわめて多い。それらはクロヒカゲ、ハルゼミなど人里に生息する普通種も多数含まれている。田代町のオオカワトンボなどもそれに近い例かもしれない。肝属山地の森林や溪流にはムカシトンボ・スギタニルリシジミなど多くの貴重な種が残存し、シータテハやオオムラサキらしい個体も目撃されており確認が待たれる。また、高隈山のブナ帯にはオオチャイロハナムグリなど霧島山との共通種がいる。ただし、ここにはヤマキマダラヒカゲ、フジミドリシジミ、エゾハルゼミなどは発見されず、今後課題を残している。また1989年の志布志町四浦でのシータテハの発見は日南山地（曾於郡を含む）の重要性を示唆している。
- b) 分布北限種も多い。ウルム氷期にこの一帯に踏みとどまった可能性をもつ照葉樹林は、その後の温暖化にともなって北上し、それとともに多くの南方系（ヒマラヤ型分布系・マレー型分

布系)の昆虫が分布を広げたであろう。大隅地方には残存した古い時代のものと、新たに南方から到達したものが混在していると思われる。その識別は容易でないが、クロイワツクツク、チビサナエ(日南に及ぶ?)、ツマベニチョウ(日南に達する)など、分布北限種やそれに準ずるものがこの一帯を南方色豊かなものにしていく。

c) 肝属山地に屋久島との共通の特産種が生息している。1990年屋久島特産種とされていたカミキリムシ2種の甫与志岳西部における発見は、その後にタマムシ2種の追加記録を生み、他の昆虫群にも大きな期待を持たせることになった。

d) 特産種としては、サタヒラタゴミムシなどを挙げられるが、調査精度が高いチョウやトンボ・セミ類では知られていない。いくつもの昆虫群で、この地域で採集された新種と目されるものは多数いるが、真に大隅半島の特産種かどうかは今後の調査に待つしかない。ちなみに、稲尾岳の甲虫類は1985年7~9月の短期間の調査ですら227種が採集され、ここでの新記録種は168種、さらに新種と思われるもの20種がいたという。高隈山などの高地帯に隔離されたものの中から特産種が発見されるであろうか。

大隅における昆虫相成立史の解明は、より詳細な調査と、各種火砕流を含む地史の検討など総合的な視野から進めなければならない。今後は残された森林地帯のみならず、人工林のクヌギ林、川沿いの自然木(ハルニレなど)、茅場・牧場としての草地・笹原、河口付近の湖沼・湿地、古い湧水池・人工溜め池など、人々の生活と関わりの深い環境も重要な調査ポイントとなる。

## (2) 本地域の注目すべき昆虫類

### トンボ目

オオカワトンボ(カワトンボ科)が1994年津田清氏によって田代町の雄川中流域で確認された(未発表)。ここではニシカワトンボ(別亜種または別種?)と混生している。過去に鹿児島市(吉野町・1933年:常盤町・1957年)、牧園町(1974年)の記録はあるが、これらの地域では現在発見されない。出現期は4~5月。

ムカシトンボ(ムカシトンボ科)は高隈山(鹿屋市・1959年)の記録があったが、近年、吾平町神野溪谷、内之浦町小田川・一つ谷、高山町二股、田代町盤山で生息が確認された。また、安楽川上流(新田山林道:末吉町一志布志町)でも目撃している(福田・未発表)。

ムカシヤンマ(ムカシヤンマ科)は高隈山(鹿屋市・1958年)、鹿屋市高須町(1958年)、内之浦町(小田川・1977年、1995年:大原・1995年)、吾平町真戸原(1992年)に記録がある。チビサナエ(サナエトンボ科)は佐多町(川口、辺塚)、田代町(新田)、内之浦町(小田川ほか)、吾平町(神野溪谷ほか)、根占町(大竹野ほか)、大根占町(県民の森)、高山町(湯之谷)、鹿屋市(打越ほか)など割に広く生息していると思われるが、高隈山系からは未記録である。なお、宮崎県北川町でも1993年の北限の採集例(1♂)がある。

タイワンシオカラトンボ(トンボ科)は佐多町杉山谷(2♂2♀、1994年)、内之浦町辺塚(1♀、1995年)で北限の記録があるが、土着しているかどうかは未確認である。

このほか、有明町のハネビロエゴトンボ、ベニイトトンボ、ベッコウトンボ、内之浦町姫門のミヤマアカネなど貴重な記録が多い。

### 半翅目

セミ類は9種を産する。ニイニイゼミ、クマゼミ、アブラゼミ、ツクツクボウシ、ヒメハルゼ

ミ（古い照葉樹林にやや局地的）、ミンミンゼミ（局地的）はおそらく各市町共通。ハルゼミはクロマツが残っておれば同じく共通で、九州本島が分布南限。ヒグラシは標高200~300m以上の山地帯に生息し、佐多町の木場岳付近が九州本島での南限と思われる。本種は南方では種子島・屋久島には産せずトカラ・奄美大島に生息している。高地帯でのエゾゼミ（モミなどの針葉樹林）、エゾハルゼミ（ブナ林）は今のところ発見されていない。逆に大隅半島を北限としているクロイワツクツクは、8月中旬から10月まで佐多町の海岸線沿いの照葉樹林に個体数が多く、鹿児島湾側では1977年のように鳴き声が鹿屋市竹の崎、大根占町皆倉・神川で記録されたことがあり、太平洋側では佐多町竹の浦付近まで記録がある。

タガメ（危急種）は、大崎町小能、有明町有明大橋、高山町たたら池での記録がある。

#### 甲虫目

屋久島特産種とされていた4種の肝属山地における発見が最も注目される。すなわち、ヤクシマミドリカミキリ（食樹：ヤブツバキ）、クロモンヒゲナガヒメリカミキリ（食樹：シキミ）が1990年に甫与志岳山麓樹林で、さらに、ヤクシマナガタマムシが1991年に内之浦町佐牟田溪谷で、ワタナベナガタマムシが1992年に甫与志岳で採集された。今後も他の科で同様な発見が相次ぐ可能性が高い。

カミキリムシ科は肝属山地に151種が知られ、うち29種が分布南限であるという。このほか、コガネムシ科のオオチャイロハナムグリ（高隈山）、フチトリアツバコガネ、タマムシ科のアヤムネスジタマムシなど北方系、南方系ともに豊富であるが、大隅全体としてはまだ調査不足の感は否めない。ハンミョウ科のイカリモンハンミョウが佐多町の大泊・田尻に多かったが、近年は発見されない。

#### 鱗翅目

チョウ類は調査精度が高く、概況や問題点をつかむにはよい素材であるが、ガ類の記録はまだ不十分である。

#### チョウ類

この地域全体ではチョウ類93種の記録があり、うち土着種は80種、迷蝶は13種。土着種の内訳はセセリチョウ科13種、アゲハチョウ科11種、シロチョウ科7種、マダラチョウ科1種、テングチョウ科1種、シジミチョウ科20種、タテハチョウ科19種、ジャノメチョウ科8種。このうち61種は、まだすべて記録されている訳ではないが、どの市町でも産すると思われる。非共通のやや局地的分布をするものを生息環境別に見ると次のようになる。

照葉樹林にはキリシマミドリシジミ（高隈山・甫与志岳・稲尾岳）、溪流沿いの樹林にはハルニレを食樹とするシータテハおよびカラスシジミ、ミズキにつくスギタニルリシジミ、その他コツバメ、サカハチチョウ。クスギの人工林やコナラ林にはミズイロオナガシジミ、ミヤマセセリ、このほか樹林性の種としてはオナガアゲハがある。

草原も重要な環境であるが、この地域には輝北町の西部、垂水市大野原をはじめ、各市町に小規模ながら古い草地があり、ギンイチモンジセセリ（南限は根占町）、ジャノメチョウ（志布志町、垂水市）、ヒョウモンチョウ類（ウラギンスジ、ミドリ、メスグロ、ウラギンの各ヒョウモン）などが生息する。絶滅危惧種に指定されているオオウラギンヒョウモンは、曾於郡や鹿屋市などに1950年から1960年代にかけて記録があり、ほぼ全域に生息していたらしいが、近年は発見されず、絶滅あるいは激減したことは確かである。しかし少数が生存している可能性もあり、各地の草原を精査する必要がある。このほか丈の低い草地にはシルビアシジミが生息し、1950年代

の安楽川や有明町の産地は消滅したが、肝属川下流域の堤防には生存している。クロシジミは幼虫がクロオオアリと共生することで有名であるが、荒地・草地に生息し、鹿屋市、佐多町に記録がある。タイワンツバメシジミはシバハギを食草として、各地に年1化の生活史をもつが、佐多町南部には2化性の系統が生息している。

今では人里昆虫にもなったツマベニチョウは、元来は亜熱帯・熱帯林の蝶であるが、佐多町では食樹ギョボクの植栽により増えた。大隅半島では内之浦町、鹿児島湾側では大根占町・根占町あたりが大隅半島の定着地北限と思われるが、しばしば北方で採集され一時的に発生することがある。日本での北限は志布志湾の枇榔島、さらに宮崎県鶴戸神宮付近に達する。

なお、ゴマダラチョウ、サトキマダラヒカゲ、クロヒカゲなど大隅半島を南限としている普通種がいることは興味深い。

迷蝶も多く、アマミウラナミシジミ（モクタチバナなどを食樹として、よく一時的な発生がみられる）、カバマダラ（トウワタ）、ウスキシロチョウ、リュウキュウムラサキなどの記録がある。

#### 膜翅目

ハチ類については、大隅半島で185種を記録した長瀬（1981）によると、この地域は北方系の種が少なく、全般的には貧弱である；ツチバチ類が多く、小型ジガバチが少ない；北限種もクロイワツチバチ、ミナミツチスガリなど少数にとどまっている；南限種は多いが、種子島などの調査が進めばどうなるか分からない；特産種としてはナガセクロツチバチがある。

### (3) 市町別に見た昆虫相とその課題

ここでは各市町の特徴や生息状況を概観する。調査の進捗は地域による差が大きいですが、おおまかには鹿児島昆虫同好会誌SATSUMAに出た報文数で知ることができる。

#### 財部町

大川原峡から瓶てん山への溪流沿いの地域は県立博物館でも自然観察会を2回ほど実施したことがあり、その記録は参加した鹿児島中央高校生物部員により、オナガサナエ、ミンミンゼミなどが部誌「さんごじゅ」に報告されている。SATSUMAの報文は3編しかないが、トンボとヒョウモンチョウ類の調査記録もあり、チョウ類はオナガアゲハ、メスグロヒョウモンなど24種の記録がある。

#### 末吉町

SATSUMAに11編の報文がある。チョウは41種。西の花房峡などの山地と河川流域はまだ調査不足であるが、スギタニルリシジミなどの記録があり、ムカシトンボらしい個体も目撃されている（1993年、福田・未発表）。シータテハなど九州山地系の種の発見に大きな期待が持てる地域である。

#### 大隅町

地形や植物相には特色の少ない地域であるが、昭和20年代に志布志高校生物部員の調査範囲で、ギンイチモンジセセリ、ミズイロオナガシジミなど57種の蝶が記録されている。カラスシジミも追加され、SATSUMAに7編の報文がある。

#### 松山町

SATSUMAの報文は5編しかなく、特筆すべき昆虫の生息環境はないが、若干の未発表データからみると平地産のほとんどの種は生息していると思われる。ハルニレの生ずる河川流域などは大切な環境である。



## 輝北町

西の丘陵地（牧場など）は草原性昆虫の生息地としてヒョウモンチョウ類などへの期待が持てる。チョウ類は38種。市成小学校で1986年にツマベニチョウが採集されたことがある。平房にはゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタルの3種を多産する。SATSUMAの報文は5編。

## 志布志町

海岸近くの低地から安楽川中流域は昭和20年代に志布志高校生物部員によりチョウ類を中心に一通りは調査されている。県立博物館の昆虫少年団の活動でもかなりの種が得られているが記録として残っていない。北部山地帯の溪流沿いの照葉樹林は近年伐採が進んでいるものの、シータテハなど希少種の生息地として注目される。

トンボ類ではアオハダトンボ（安楽川：絶滅？）の記録がある。ハッチョウトンボは安楽橋付近で1958年に発見されたが、現在は絶滅。しかし夏井の休耕田で1993年に多産地が発見された。

チョウ類は73種が記録されており、昭和20年代からの変遷をいくらか知ることができる。たとえば、ギンイチモンジセセリは1950年代には見られなかった種であるが、1969年から1978年ごろには横尾下、田之浦、安楽、若宮などに多産した。しかし、現在は姿を消している。ミズイロオナガシジミは志布志中学校周辺のクスギ林にも生息していたらしいが、現在は不明。森山などでは若干の産地があるという。安楽川上流の田之浦、福島川上流の四浦にはスギタニルリシジミ、ジャノメチョウ、サカハチチョウなどの産地がある。ちなみに、シータテハは1989年4月26日、四浦のハルニレで幼虫が発見されたものである。

セミ類は夏井海岸にミンミンゼミが多く、志布志湾沿いの海岸にはハルゼミがいる。

甲虫類では海浜性のイカリモンハンミヨウは1960年代に昔の志布志駅の下海辺で記録されたが、現在は埋め立てられている。宮崎県の海岸線で近年発見された産地が点在しているので、夏井などは可能性がある。

枇杷島は1951年以來7～8月を中心に十数編の調査報告がある。チョウは34種の記録があるものの、3分の1は偶然飛来した非土着種で、毎年ここで世代を重ねている種は少ないと思われる。ツマベニチョウは1975年から1982年の間に侵入したらしいが、現在は定着しているようである。ガ類では南方系のベニモンコノハが注目される。森林性の甲虫は意外に多いので、年間を通して各群の昆虫を調査すれば面白ところである。

## 有明町

低山地、人里性の種が一通りは見られる。チョウ類は土着種63種が知られ、発見の期待がかかる種としてはヒメキマダラセセリ、ミヤマチャバネセセリ、オナガアゲハ、ミヤマカラスアゲハ、カラスシジミ、クロシジミ、タイワンツバメシジミ、ウラギンスジヒョウモン、サカハチチョウ、ジャノメチョウなどがある。トンボ類では普現堂池（蓬の里）で1990年に36種が記録された。なかでも、ベニイトトンボは貴重である。1991年にはハッチョウトンボもいたらしいが、その後発見されていない。この池が多様性を持つよう管理されればさらにトンボ相は豊かになろう。国立病院近くの池（湿地帯）では近年ベッコウトンボが発見されている。ホタル類はゲンジ・ヘイケのほかヒメボタルが蓬原に生息する。SATSUMAには14編の報文がある。

## 大崎町

チョウ類は53種が記録されているが、未発表の種がいくらかあるかも知れない。有明町と類似した昆虫相と推定される。ここでは海浜の砂丘やクロマツ林の調査に期待がかかる。タガメは1980年小能の川で採集されたもので、県昆虫展に出品されていた。SATSUMAの報文は24編。

## 垂水市

高隈山の西麓部として比較的よく調査されている。本城川中流・上流域の照葉樹林と高峠・大野原などの草原は注目すべき昆虫類の生息環境である。猿ヶ城溪谷にはカラスシジミ、スギタニルリシジミ、トラフシジミ、コツバメなどのチョウ類やミナミヤンマなどのトンボ類が見られる。一方、大野原の草原では1958年ジャノメチョウの記録があるが、その後発見されていない。高峠とともに草原の維持は大きな課題であろう。高峠にある鹿大農学部の実習林一帯の昆虫相は蛾類なども一通り調査されているが、まとまった目録はない。また、市街地の植栽されたギョボクにツマベニチョウが飛来・発生したことがある。SATSUMAには51編の報文がある。

## 高隈山

山頂部のブナ帯は照葉樹を含み、オオチャイロハナムグリ、オニクワガタ、キリシマミドリシジミなど注目すべき種が見られる。しかし、南限のブナにどのような昆虫がついているかはまだよく分からない。虫えいをつくるタマバエでブナにつくものとして、紫尾山では9種、高隈山では4種が知られている。紫尾山のようにフジミドリシジミ、エゾハルゼミなどのブナ依存種は未発見である。甲虫類ではモウセンハナカミキリ、ムモンチャイロホソバネカミキリ、セダカコブヤハズカミキリ、オオセンチコガネなどが注目される。

## 鹿屋市

自然度の比較的高い高隈山の森林帯と渓流域、人里環境の市街地、耕作地、湖水さらに南の横尾岳(草地)など変化にとんだ環境をもつ。したがって、貴重な種類は高隈山に多いが、その周辺部にも興味ある昆虫が少なくない。その中で北部の高隈溪谷(重田溪谷)はムカシトンボ、ムカシヤンマなどのトンボ類、スギタニルリシジミ、コツバメ、トラフシジミ、サカハチチョウなどのチョウ類の生息地である。大隅湖はまだ歴史が浅く今のところ特筆すべき種は見られないが、七つ谷ではアオハダトンボ、小屋谷ではオオハラビロトンボ、下高隈の谷田ではハッチョウトンボの記録がある。チョウ類は83種が記録され、中でもクロシジミは貴重である。本種は高牧町の荒れ地・草地のアキゲミにつくグミキジラミの近くに産卵し、幼虫はクロオオアリに運ばれてアリの巣で育つ。最近ではハングライダーの練習場の草地に細々と生き残っている。SATSUMAには110編の報文がある。

## 申良町

ほとんどが笠之原台地の耕作地帯であるが、チョウは56種が記録されている。肝属川の堤防草地は年間を通して調査すれば、かなりの草原性昆虫が明らかになると思われる。SATSUMAには22編の報文がある。この中には、細山田中学校のプールに1992年～1993年、18種のトンボが飛来して、タイリクアカネ、ネキトンボ、ウスバキトンボなどが産卵してここで発生したという報告もある。

## 東申良町

1980年「東申良町誌」に「昆虫」としてまとめてある(福田)。チョウ類はその後追加されて46種になった。SATSUMAには14編の報文がある。

## 高山町

国見山、黒尊岳、甫与志岳、八山岳と続く山地帯の北西山麓部、とくに甫与志岳西麓の湯ノ谷、二股川にかけて溪流沿いに残された照葉樹林は未知の昆虫類の宝庫といってよい。ここでは従来屋久島特産種とされていた甲虫類(前記)が発見され、今や稲尾岳に勝るとも劣らない肝属山地のなかで最も貴重な樹林となった。ケブカトラカミキリの自然分布地でもあるこの樹林は、今後

も人手を加えることなく保護して欲しい。溪流にはムカシトンボ、ムカシヤンマ、ミナミヤンマなどのトンボ類も豊富である。ほかにも本城のアオサナエ、尾牟礼のチビサナエなど注目種が多い。チョウ類は65種が記録され、高地の照葉樹林にはキリシマミドリシジミも産する。低地の湖沼（池之園池）では水生甲虫のコガシラミズムシ類（3種）、ゲンゴロウ類（15種）、ミズスマシ類（2種）、ガムシ類（16種）の記録がある。SATSUMAの報文は27編。

#### 吾平町

八山岳北麓部の神野溪谷でムカシトンボ、オジロサナエなどのトンボ類の記録がある。SATSUMAには10編の報文があり、チョウは57種が記録されている。

#### 内之浦町

国見山から甫与志岳をへて稲尾岳にいたる東側の山地帯の照葉樹林は、ここから高山町にかけて志布志湾の砂浜に変わっていくが、風などのため低い樹木が多く、人手も入って量的にもあまり多くないにもかかわらず、姫門のスギタニルリシジミ、チビサナエ、五郎ヶ元のミナミヤンマ、小田川上流のムカシトンボなどが生息している。チョウ類は70種が知られ、ツマベニチョウの大隅半島での北限が国見山山麓部にある。SATSUMAの報文は29編。

#### 大根占町

八山岳から鹿児島湾にそそぐ神ノ川流域はまだよく調査されていない。SATSUMAには20編の報文がある。チョウ類は63種が記録されている。

#### 根占町

辻岳、野首岳、木場岳などの山地帯は面白い環境であるが、まだよく調査されていないのが惜しまれる。SATSUMAには39編の報文があり、チョウは59種の記録がある。

#### 田代町

荒西山から六郎館岳、さらに稲尾岳へ続く山地帯に始まる雄川水系は、オオカワトンボのいることが明らかになり新たな注目を集めている。ただ、源流部はすでに照葉樹林が少なく、スギタニルリシジミは発見されない。稲尾岳からその北西部にあたる花瀬から鶴戸野、さらに盤山にいたる一帯は比較的調査がなされている。盤山にはムカシトンボ産し南限となっている。オオムラサキがいるだろうか？ SATSUMAには24編の報文しかないが、稲尾岳をめぐる調査報告書が参考になる。今後は照葉樹林の残存する小さな溪流の調査に期待がもてよう。

#### 佐多町

よく調査されているのは伊座敷から大泊を経て佐多岬にいたる地域で、ひとところかなり注目されたが、南西諸島の調査が進み、さらに佐多町から内之浦町にかけての太平洋側の調査が進むにつれ、その特殊性はいくらか低くなり、観光地化して調査対象地としての興味は減少した。しかし割によく保存された樹林はまだ魅力がある。甲虫のヤマトサビクワガタは、本町と徳之島で発見された新種であった。ただ、この地域で採集された多くの昆虫は、多年にわたって各地の文献に発表されており、それらをまとめた昆虫目録はまだ作成されていない。東側の大泊から稲尾岳下にいたる海岸線の樹林、木場岳～稲尾岳の森林地帯の調査記録は少ないが、チビサナエ、スギタニルリシジミ（南限）を産する。SATSUMAの報文は105編。記録されたチョウは75種。本町の名を持つ昆虫にはサタサビカミキリ、サタヒラタゴミムシ、サタツヤゴモクムシ、サタアナアキゾウムシなどがある。以前はツマベニチョウを地元ではサタチョウと呼んでいた。このチョウの舞い飛ぶ姿とクロイワツクツクの特異な鳴き声はこの地域の自然の風物詩である。照葉樹林だけでなく、路傍には食草シバハギの開花期に合わせて羽化する多化性のタイワンツバメシジミが

いる。ちなみにこのチョウは佐多町以外では年1化である。海浜性昆虫も多彩であるが、かつては田尻と大泊の砂浜に多かったイカリモンハンミョウ（絶滅危急種）が姿を消したのが惜しまれる。

謝辞：本稿を草するにあたり、SATSUMAの文献について資料を提供していただいた大坪修一氏（樋脇小学校）に深謝の意を表する。

#### 参考文献

ここでは主なものを紹介するにとどめるが、1980年代初期までのものは「鹿児島県の自然環境に関する文献目録」（鹿児島県環境管理課，1985：総頁148）にまとめてある。

#### 鹿児島昆虫同好会会誌「SATSUMA」

中尾健一郎（1968）鹿児島県のハンミョウ. SATSUMA17（50）：13-20.

長瀬博彦（1981）鹿児島県の蜂. SATSUMA 30(86)：253-287.

松井英司・高井泰・田辺力（1988）鹿児島県の水生甲虫相. SATSUMA 37（100）：61-115.

森一規（1988）鹿児島県カミキリムシ分布表. SATSUMA 37（100）：119-148.

湯川淳一（1988）鹿児島県のタマバエゴール. SATSUMA 37（100）：175-205.

大坪修一・田中洋（1988）鹿児島県産蝶類・市町村別分布表. SATSUMA 37（100）：223-238.

本文中に記したようにこの雑誌には多数の報文が出ているが、バックナンバーは県立博物館や県立図書館で見ることができる。

#### 。その他の雑誌

江崎悌三ほか5名（1953）大隅採集旅行記. 新昆虫6（3）：32-45.

上宮健吉（1966）鹿児島県大隅半島の蛾類. LEBEN（8）：34-47.

中根猛彦・牧野信市（1985）日本と台湾に産するサビクワガタについて. 月刊むし（169）18-25.

森一規（1991）大隅半島南部のカミキリムシ. 月刊むし（240）：4-13.

藤田宏（1991）九州本土に屋久島があった!! . 月刊むし（240）：14-15.

堤内雄二（1996）大隅半島で採集した屋久島特産種のタマムシ. 月刊むし（308）：36.

福田晴夫（1993）曾於郡南部の生物的自然. 松径（志布志高校研究紀要）（1）：1-5.

松木和雄ほか（1995）大隅半島のトンボ類. 九州虫の会会誌（15）：13-35.

今村久雄・今村浩継（1996）大隅半島のトンボ類の記録. 大隅昆虫記（3）：16-30.

#### 。調査報告書

竹村芳夫（1973）大隅半島南部の昆虫. 大隅南部自然公園予定地学術調査報告書：71-96.（鹿児島県／国立公園協会）.

竹村芳夫・福田晴夫（1975）昆虫類. 志布志湾地域の生態学的基礎調査，昭和49年度報告書：107-035.（地域開発コンサルタンツ）

福田晴夫（1986）動物調査・昆虫類. 環境保全対策基礎調査報告書・大隅地区：235-374.（九州農政局計画部資源課）

櫛下町鉦敏（1986）稲尾岳自然環境保全地域及び周辺地域の昆虫相. 稲尾岳自然環境保全地域調査報告書：175-204.（環境庁自然保護局）

中根猛彦ほか4名（1986）稲尾岳自然環境保全地域及び周辺地域の甲虫相. 稲尾岳自然環境保全地域調査報告書：205-230.（環境庁自然保護局）

松比良邦彦（1995）大隅半島における希少なトンボの分布調査．公益信託タカラ　ハーモニストファンド第10回研究助成報告：37-46.

・鹿児島県立博物館の刊行物

鹿児島県立博物館収蔵資料目録　第1集（1992年：トンボ・セミ）；第2集（1993年：チョウ）；第3集（1994年：ガ・ハエ・カメムシ・ハチ・バッタ・甲虫）。1950年代から福田が大隅地方で採集した多くの昆虫についての細かなデータはこれに出ている。もちろん1980年代以降の収集資料も含まれる。

（執筆者：福田晴夫，江平憲治）

## 8 大隅の両生類・爬虫類相

### (1) 大隅の両生類・爬虫類の概要

両生類・爬虫類はそれぞれの習性から、川の源流域の森林から平野部や耕作地、湖沼、河川などの環境を選び、それに適応しながら生きている。

両生類・爬虫類の中で大隅地区だけに生息するというような固有の種はなく、また、環境庁の編纂した「レッドデータブック」(日本の絶滅のおそれのある野生生物)の掲載種もない。しかし、稲尾岳はブチサンショウウオの生息の南限である。肝付山塊に生息するサンショウウオは学者によっては種の分化が進んでいるとして、現在、検索の研究を進めているなど学術的な注目をあつめている。

大隅の両生類・爬虫類相に関しては環境庁(1993)により、鹿児島県内の生息種について概要をつかむことが出来る。肝属川水系の両生類・爬虫類相については筆者らによる建設省(1994)の報告がある。川の源流域に生息するブチサンショウウオについて森田(1989)の記載がある。

今回の調査対象市町村は、曾於郡の大隅町、輝北町、財部町、末吉町、松山町、志布志町、有明町、大崎町の8町。肝属郡の垂水市、鹿屋市、串良町、東串良町、内之浦町、高山町、吾平町、大根占町、根占町、田代町、佐多町の2市9町である。

### (2) 両生類相・爬虫類相の概説

日本の両生類・爬虫類の分布状況は哺乳類と似ているが、移動能力や環境適応に限界があり、地域を限って生息・分布する種も多い。

両生類・爬虫類はあまり目立たない存在であるが、近年、急速に進んでいる開発や環境破壊の進行状況をつかむ目的の「環境アセスメント」調査などを行うときの指標動物として重要な生物であり、重要視されている。

現在、大隅に生息するとされる両生類・爬虫類にはブチサンショウウオ、イモリ、ニホンヒキガエル、アマガエル、タゴガエル、ヤマアカガエル、ニホンアカガエル、トノサマガエル、ヌマガエル、ウシガエル、ツチガエル、シュレーゲルアオガエル、カジカガエル、アカウミガメ、イシガメ、スッポン、ヤモリ、ニホントカゲ、カナヘビ、シマヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、シロマダラ、ヒバカリ、ヤマカガシ、マムシの26種があげられる。

今回は分類段階の目のグループごとに、既存の関係資料と文献を参考にし、一部に筆者の知見を加え鹿児島県の大隅の両生類・爬虫類相について概説する。

#### ① サンショウウオ目

##### a. ブチサンショウウオ

ブチサンショウウオは山地溪流型のサンショウウオで、森田(1989)によれば大隅の高隈山と稲尾岳の生息を示している。筆者(1996)の夏と秋の調査で、稲尾岳の沢、並びに源流域で本種の幼生を多数確認出来た。同じように、筆者(1996)の夏と秋の高隈山の調査で、西斜面(本城川の源流域)の二本の沢の確認調査を行ったが、この時は発見できなかった。

##### b. イモリ

イモリは大隅の全域の山間部の湧水地や小川で確認出来る。しかし、以前は水田などでも多数確認出来たが、最近は農薬などの害のおよばない地区だけにわずかに生息しているよう

である。

② カエル目

a. ニホンヒキガエル

ニホンヒキガエルは大隅の全域で確認出来る。肝属川水系の上流から下流まで、また、水域から離れた耕作地や集落内でもみられる。筆者(1996)の夏の調査で、稲尾岳の頂上に近い稜線で確認している。

b. アマガエル

アマガエルは大隅の全域で確認出来る、ごく一般的なカエルである。

c. タゴガエル

タゴガエルはアカガエル科のタゴガエル属として分類されているカエルである。山地に普通にみられる種であるが、伏流水中に少数の大きな卵を産む変わった繁殖習性をもつ特異な種のため、その存在があまり知られていない。稲尾岳・高隈山の筆者(1996)の夏と秋の調査で多数の個体を確認できた。

d. ヤマアカガエル

ヤマアカガエルの生息は、環境庁(1993)によれば鹿児島県全域に分布しているようになっている。筆者の採集調査では現在のところ確認できていない。

e. ニホンアカガエル

ニホンアカガエルは大隅の全域で確認出来る、ごく一般的なカエルである。

f. トノサマガエル

トノサマガエルは大隅の全域の河川および水田などの水辺で確認出来る、ごく一般的なカエルである。

g. ヌマガエル

ヌマガエルは大隅の全域の河川および水田などの水辺で確認出来る、ごく一般的で数の多いカエルである。

h. ウシガエル

ウシガエルは大隅の全域の河川や池等で確認できる。本種は食用蛙として日本にもたらされたが、原産地はアメリカ合衆国で、日本では帰化動物の代表的な種である。鳴き声が牛の鳴き声に似るため、この名がついている。

i. ツチガエル

ツチガエルは大隅の山地の水田や小川でみられ、ヌマガエルと一部重複するが、数は少ない。

j. シュレーゲルアオガエル

シュレーゲルアオガエルは大隅の全域で確認出来る、ごく一般的なカエルである。しかし、緑色をしたカエルであり、アマガエルと混同されていたためあまり知られていない。秋の暖かい日の夜など、カッ・カッ・カッ・カッという特徴のある鳴き声で鳴く。

k. カジカガエル

カジカガエルは大隅の山地の渓流域、とくに玉石がごろごろと転がり、水しぶきをあげて流れる清流であれば、ほとんどの川でみられる。数は多くない。

③ カメ目

a. アカウミガメ

アカウミガメは日本本土で産卵する唯一の海亀であり、特に鹿児島県・宮崎県の上陸頭数が多い。鹿児島県の大隅半島の海岸では、太平洋側で砂浜をもつ志布志湾に接する海岸での上陸が多い。しかし、岩礁地の多い佐多町辺塚漁港のわずかな砂浜にも上陸しているのを確認したが、今後、詳細な海岸線の調査を行い、上陸状況を把握する必要がある。

b. イシガメ

イシガメは淡水産の亀で肝属川などの主要河川、池、溪流でみられ、幼体はゼニガメともいわれる。

c. スポボン

スポボンは肝属川やその他の主要河川でかなり多くみられる。

④ トカゲ目トカゲ亜目

a. ヤモリ

ヤモリは大隅の全域で確認出来る、ごく一般的なヤモリである。主に民家、農作業小屋、乾燥した木の皮の裏側などで、雨が直接かからない場所をすみかにしている。

b. ニホントカゲ

ニホントカゲは大隅の全域で確認出来る、ごく一般的なトカゲである。おもに、耕作地や山林、林道などでみかけ、やや乾燥した環境を好むようである。

c. カナヘビ

カナヘビは大隅の全域で確認出来る、ごく一般的なトカゲで数も多い。おもに、草原、耕作地、河川敷などでみかけ、小さい昆虫のバッタ類の多い環境を好むようである。

⑤ トカゲ目ヘビ亜目

a. アオダイショウ

アオダイショウは大隅の全域で確認出来る、ごく一般的なヘビである。おもに、民家周辺でネズミを餌にしているため必然的に集落内に多いことになる。しかし、人里から離れた森林内でも見かけることがある。

b. シマヘビ

シマヘビは大隅の全域で確認出来る、ごく一般的で最も多いヘビである。おもに草原、耕作地、河川敷でみられ、特に肝属川の河川敷内で最も多いヘビである。ほとんどの成蛇は灰色に縦縞が多いが、全身真っ黒な黒色型のシマヘビも多い。また、シマヘビの幼蛇は赤っぽい縞模様をしていて、別種のヘビを思わせるような体色をしている。この種は他のヘビに比べ攻撃的な特性を持っている。

c. ジムグリ

ジムグリは大隅の全域で確認出来るヘビであるが、数はあまり多くない。幼蛇と成体との体の模様が極端に違っており、とくに幼蛇の模様は美しい。

d. シロマダラ

シロマダラは大隅の全域で確認出来るヘビであるが、数はあまり多くない。白と黒の斑模様は特徴がある。

e. ヒバカリ

ヒバカリは大隅の全域で確認出来るヘビであるが、数はあまり多くない。やや小型のヘビで、目の後ろの模様と腹板の縁の点状の模様が特徴である。

f. ヤマカガシ



ヤマカガシは大隅の全域で確認出来る、ごく一般的で多いヘビである。おもに水田、池、沼地などでカエルを餌にするため、水辺に近い環境を好む。

g. ニホンマムシ

ニホンマムシは大隅の全域で確認出来る、ごく一般的なヘビである。おもに水田、池、沼地などでカエルを餌にするため、水辺に近い環境を好む。

参考 (引用) 文献

- 鹿児島県 (1989). 鹿児島のがくれた自然. 鹿児島県保健環境部環境管理課.  
環境庁 (1981). 日本の重要な両生類・爬虫類—南九州・沖縄版. 大蔵省印刷局. 東京  
環境庁 (1991). 日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—. 日本野生生物研究センター. 東京  
環境庁 (1993). 日本産野生生物目録—本邦産野生動植物の種の現状—. 自然環境研究センター. 東京  
建設省 (1994). 河川水辺の国勢調査 (両生類・爬虫類・哺乳類調査)・肝属川. 建設省河川局治水課  
前田憲男・松井正文 (1989). 日本のカエル図鑑. 共立出版株式会社. 東京  
松井孝爾 (1976). カエルの世界. 平凡社. 東京  
松井孝爾 (1977). ヘビの世界. 平凡社. 東京  
中村健児・上野俊一 (1963). 原色日本両生爬虫類図鑑. 保育社. 大阪  
千石正一 (1979). 原色両生・爬虫類. 家の光協会. 東京 (執筆者: 鮫島正道)



ブチサンショウウオの生息地



ニホンアマガエル



ニホントカゲ



アオダイショウ (幼蛇)

## 9 大隅の鳥類相

### (1) 大隅の鳥類の概要

日本の鳥類の生活は1年を通じてみると、繁殖期と非繁殖期からなり、その間に渡りを行う移動性のものと、周年定着性のものとある。移動性のものには短距離の地域移動から長距離の渡りまであり、何れも繁殖地と越冬地の年周期移動である。鳥を移動の観点からみると、渡り鳥（冬鳥・夏鳥・旅鳥）と留鳥（漂鳥・真留鳥・半留鳥）に区分される。

大隅地区でみられる鳥類は、一年を通して生息する留鳥（カラスやスズメ等）と、春になれば繁殖のために北に渡っていく冬鳥（カモ類やツグミ等）や南から渡ってくる夏鳥（ツバメやワシタカ類等）、そして、秋になると越冬のために北から渡ってくる冬鳥（カモ類やツグミ等）や南に渡っていく夏鳥（ツバメやコアジサシ等）がある。大隅半島は鷺鷹類の渡りでも有名であり、異常気象などによって迷鳥の飛来もよく話題に上る地域である。

今回の調査対象市町村は、曾於郡の大隅町、輝北町、財部町、末吉町、松山町、志布志町、有明町、大崎町の8町。肝属郡の垂水市、鹿屋市、串良町、東串良町、内之浦町、高山町、吾平町、大根占町、根占町、田代町、佐多町の2市9町である。

### (2) 鳥類相の概説

大隅地区の純粋な鳥類となると、周年を通して当地に生息する鳥の留鳥であろう。ここでは留鳥を中心に記載するが、渡り鳥について簡単に、また、環境庁編「レッドデータブック」（日本の絶滅のおそれのある野生生物）に掲載されている特殊鳥類については、既存の関係資料と文献を参考にし、一部に著者の知見を加え、各グループごとに概説する。

#### ① カイツブリ目

カイツブリは大隅地区の河川や湖沼に一般的で、一年を通して生息する留鳥である。大隅地区ではこのほかに冬鳥としてカンムリカイツブリ、アカエリカイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリが飛来する。

「レッドデータブック」の危急種としてカンムリカイツブリがあるが、鹿児島県(1987)では大隅湖1985.3.7：1羽の記録がある。大隅ブロック野鳥の会(1997)では肝属川河口1996.1.15：1羽、大崎町菱田川1997.1.26：3羽、大隅湖では冬季よくみかけるとある。

#### ② ミズナギドリ目

オオミズナギドリは鹿児島県(1987)では佐多枇榔島で繁殖するとある。

ハシボソミズナギドリは志布志湾沿岸1974.5.19～20：121羽(11羽生存)漂着、志布志大泊まり海岸1974.5.20：7羽死体で打ち上げられた記録がある。

#### ③ ペリカン目

ペリカン科ハイロペリカンは古い記録であるが、志布志町安楽川河口1919.10～11：1羽の記録がある。

カツオドリ科カツオドリは佐多岬、大崎町横瀬などに飛来する。

ウ科カワウは鹿屋市大隅湖でみられる。ウミウは佐多岬をはじめ錦江湾、太平洋岸で冬季にみられる。

ゲンカンドリ科オオゲンカンドリは佐多町1985.10.6：1羽、著者は肝属川河口柏原海岸キャン

ブ場にて1980.8.25：1羽確認している。

#### ④ コウノトリ目

大隅地区の河川や湖沼にみられるサギ科の鳥は、ヨシゴイ、ミゾゴイ、ゴイサギ、ササゴイ、アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギなどである。クロサギは海岸線に一年を通して生息する鳥である。

上記のサギ科の鳥のなかで「レッドデータブック」の希少種としてミゾゴイが、鹿児島県(1987)の記録で末吉町二之方1979.5.11：1羽、佐多町大泊 1984.10.16～17：1羽がある。大隅ブロック野鳥の会(1997)では鹿屋市王子町和田井堰 1991.7.27：1羽の記録がある。

トキ科の鳥で「レッドデータブック」ではヘラサギ、クロツラヘラサギをいずれも希少種として区分している。ヘラサギは大崎町菱田 1984.11.11：1羽の記録がある。大隅ブロック野鳥の会(1997)ではヘラサギとクロツラヘラサギを東串良町川西肝属川 1992.2：各1羽確認している。

#### ⑤ カモ目

ガンやカモの仲間はほとんどが冬鳥であるがカルガモは留鳥とされている。しかし、夏も居残るカルガモは極一部であり、ほとんどは他のカモ類と同じで渡り鳥である。大隅地区ではコハクチョウ、アカツクシガモ、ツクシガモ、オシドリ、マガモ、カルガモ、コガモ、トモエガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、シマアジ、ハシビロガモ、ホシハジロ、アカハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、ウミアイサそしてカワアイサの記録がある。これらのガンカモ類の中で「レッドデータブック」ではツクシガモは危急種、コハクチョウ、アカツクシガモ、オシドリ、トモエガモ、アカハジロは希少種として区分されている。

ツクシガモは大隅ブロック野鳥の会(1997)では有明町菱田川 1996.1.7：4羽の記録がある。

コハクチョウは大隅ブロック野鳥の会(1997)では内之浦町岸良 1994.12.4：1羽の記録がある。

アカツクシガモは鹿児島県(1987)での記録で志布志 1984.11がある。

オシドリは鹿児島県(1987)の記録で末吉町二之方 1985.6.27:2羽,1986.1.19：4羽、垂水市鹿大高隈演習林申良川上流大隅湖 1983.11.20：6羽,1983.12.20:97羽,1984.1.14：10羽,1986.12.16：36羽がある。大隅ブロック野鳥の会(1997)の記録では高山町鑪池 1991.8.11:6羽、同地 1991.10.21：10羽の観察がある。1991.8.11：6羽のエクリプスの写真記録があり、夏場の確認は繁殖の可能性を示唆するものである。

トモエガモは鹿児島県(1987)の記録で大隅湖 1986.12.16：5羽がある。大隅ブロック野鳥の会(1997)の記録では鹿屋市川東町 1996.10.26：数羽、大隅湖でも数羽観察している。

アカハジロは大隅ブロック野鳥の会(1997)の記録では肝属川河口 1996.1.7：5羽がある。

#### ⑥ タカ目

ワシタカ類ではミサゴ・トビが留鳥である。トビは海岸や湖沼そして市街地に多くごく一般的な鳥である。ミサゴは大きな河川や岩礁地区にみられる。大隅地区ではこのほかにワシタカ科のハチクマ、オジロワシ、オオタカ、アカハラダカ、ツミ、ハイタカ、ケアシノスリ、オオノスリ、ノスリ、サシバ、クマタカ、カラフトワシ、チュウヒ。ハヤブサ科のハヤブサ、チゴハヤブサ、コチョウゲンボウ、チョウゲンボウの記録がある。これらワシタカ類の中で「レッドデータブック」ではオジロワシ、クマタカは絶滅危惧種、ミサゴ、オオタカ、チュウヒ、ハヤブサは危急種、ハチクマ、ハイタカは希少種として区分されている。

オジロワシは鹿児島県内では冬季に出水平野に稀に飛来する。大隅地区では大隅ブロック野鳥の会(1997)の肝属川河口・高山町波見 1992.3.21：1羽(幼鳥)、同年 3.14、同個体と思われる幼

鳥を鹿大野鳥研が桜島で確認している。

クマタカは鹿児島県(1987)の記録で佐多岬 1977.10.8~11: 2羽, 1979.10.3~21: 2羽, 高隈山大篋柄岳山頂 1987.2.1: 1羽, 大隅ブロック野鳥の会(1997)の記録では高山町権現山 1996.10.12: 1羽, 内之浦町岸良 1995.9: 2羽, 1995.1: 1羽がある。

ミサゴは肝属川河川および河口, 大隅湖で年間を通して見られるが, 鹿屋市市街地にも出現する。肝属川河口付近では繁殖も確認できている。

オオタカは鹿児島県(1987)の記録で佐多岬 1975.10.10: 8羽(渡り), 1977.10.10: 1羽(渡り), 佐多町大泊 1983.12.23: 1羽。大隅ブロック野鳥の会(1997)の記録では高山町 1996.10.19: 1羽, 高山町鶴峯橋 1996.10.17: 1羽, 串良町共心 1996.10.10: 2羽, 桜島有村 1996.10.15: 1羽がある。

チュウヒは佐多岬において渡りの個体を確認できる。

ハヤブサは佐多岬毎年10月10日前後に渡りの個体を確認できる。大隅ブロック野鳥の会(1997)の記録では串良町林田橋 1996. 5.25: 1羽, 高山町有明 1996.10.10: 1羽がある。

ハチクマは大隅半島全域において毎年渡りの個体を確認できる。鹿児島県(1987)の記録で田代町稲尾岳中腹 1985.10.13: 1羽がある。大隅ブロック野鳥の会(1997)の記録でも毎年渡りの個体を確認している。

ハイタカは大隅半島全域において毎年渡りの個体を多数確認できる。

#### ⑦ キジ目

大隅地区ではキジ類はコジュケイ・キジ・コシジロヤマドリが留鳥であり, ウズラは冬鳥として飛来する。コジュケイは大隅地区のいたるところでみられ, キジは平地部, コシジロヤマドリは山地部で一般的である。「レッドデータブック」の希少種としてコシジロヤマドリがある。

コシジロヤマドリは鹿児島県(1987)の記録で垂水市鹿大高隈演習林岳野 1960.11.15: ♂1羽・♀3羽, 同高隈演習林歩道 1972. 5.21: ♀1羽, 同同高隈演習林旧事務所 1971.11.23: ♀1羽, 大隅湖畔 1986.2.14: ♂1羽, 田代町麓 1984.1.20: ♂1羽がある。大隅ブロック野鳥の会(1997)の記録では内之浦町大浦 1995.5.10: ♀1羽(抱卵中)がある。

#### ⑧ ツル目

大隅地区ではクイナ科のバンは留鳥である。大隅地区ではツル科のクロヅル, ナベヅルの記録がある。1927年に曾於郡野方村における鶴の飛来調査(第1回)が行われたことが博物同志会報1巻1号に記載されていることから, これまでに野方はツルの飛来地であったことがうかがえる。極最近になりナベヅルの飛来記録が出た。クイナの仲間ではクイナ, ヒクイナ, バン, ツルクイナ, オオバンの記録がある。「レッドデータブック」の危急種としてナベヅル, 希少種としてクロヅルがある。

ナベヅルは大隅ブロック野鳥の会(1997)の最近の記録で鹿屋市寿上空 1996.11.17: 15羽(群飛翔), 鹿屋市下高隈町 1996.11.24: 1羽, 串良町有里 1997.1.26: 1羽がある。

クロヅルは串良町有里平和公園 1973.11.18: 1羽(幼鳥)の記録がある。

#### ⑨ チドリ目

チドリ類のコチドリ・イカルチドリ・シロチドリ。シギ類のイソシギが留鳥とされている。

大隅地区の河川の河口部や平野部には沢山の種類のシギ・チドリ類が飛来する。これまでにチドリ科のハジロコチドリ, コチドリ, イカルチドリ, シロチドリ, メダイチドリ, ムナグロ, ダイゼン, ケリ, タゲリ。シギ科のキョウジョシギ, トウネン, ハマシギ, オバシギ, ミユビシギ,

ヘラシギ、エリマキシギ、キリアイ、アオアシシギ、クサシギ、タカブシギ、キアシシギ、イソシギ、ソリハシシギ、ダイシャクシギ、ホウロクシギ、チュウシャクシギ、ヤマシギ、タシギ、アオシギ。セイタカシギ科のセイタカシギ。ヒレアシシギ科のアカエリヒレアシシギ。ツバメチドリ科のツバメチドリ。カモメ科のユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、カモメ、ウミネコ、グロカモメ、ハジロクロハラアジサシ、クロハラアジサシ、ハシブトアジサシ、ベニアジサシ、エリグロアジサシ、アジサシ、セグロアジサシ、コアジサシの記録がある。ウミスズメ科のウミスズメやカンムリウミスズメは鹿屋市古江沖、大根占沖でみられる。

上記のチドリ目の中で「レッドデータブック」では、危急種にカンムリウミスズメ。希少種のホウロクシギ、セイタカシギ、ツバメチドリ、ベニアジサシ、エリグロアジサシ、コアジサシウミスズメがある。

カンムリウミスズメは鹿児島県(1987)の記録で大根占沖 1984.4.23：2羽がある。

ホウロクシギは大隅ブロック野鳥の会(1997)の記録で大崎町菱田川河口 1996.3.20：10羽確認がある。

セイタカシギは大隅ブロック野鳥の会(1997)の記録で肝属川河口 1996.5.25：2羽、肝属川中流域 1995.4：確認。

ツバメチドリは鹿児島県(1987)の記録で東串良柏原海岸 1974.10.9：2羽がある。大隅ブロック野鳥の会(1997)の記録では鹿屋市野里町 1995.9：2羽、鹿屋市自衛隊基地 1996.6.22：32羽(繁殖がみられる)がある。

ベニアジサシは殆どは南西諸島以南の鳥であるが、大隅ブロック野鳥の会(1997)の記録では志布志町安楽川河口部 1996.6.26：数羽確認。

エリグロアジサシは殆どは南西諸島以南の鳥であるが、大隅ブロック野鳥の会(1997)の記録では志布志町安楽川河口部 1996.6.26：20羽確認。

コアジサシは大隅ブロック野鳥の会(1997)の記録では、志布志町安楽川河口部で毎年4月から7月にかけて繁殖活動が確認されている。

#### ⑩ ハト目

大隅地区ではハト類ではキジバト、アオバトが留鳥である。「レッドデータブック」の危急種そして国指定の天然記念物のカラスバトがあるが、大隅地区での記録は現在のところ無い。

#### ⑪ ホトトギス目

ホトトギス類には留鳥はない。大隅地区ではホトトギス科ジュウイチ、カッコウ、ツツドリ、ホトトギスの記録がある。

#### ⑫ フクロウ目

大隅地区ではフクロウ類のフクロウ、オオコノハズクが留鳥である。渡り鳥としてコミミズク、コノハズク、アオバズクの記録がある。

#### ⑬ ヨタカ目

大隅地区ではヨタカ科ヨタカが夏鳥として渡って来る。

#### ⑭ アマツバメ目

大隅地区ではアマツバメ類のヒメアマツバメが留鳥である。渡り鳥としてハリオアマツバメ、アマツバメの記録がある。

#### ⑮ ブッポウソウ目

大隅地区ではブッポウソウ目カワセミ科でヤマセミ、カワセミが留鳥である。夏鳥としてアカ

シヨウビンが渡来する。また、1996年6月23日、ヤマシヨウビンの写真撮影に大隅ブロック野鳥の会の山下孝氏が成功し、新聞を賑わした。

#### ⑯ キツツキ目

キツツキ類ではアオゲラ、オオアカゲラ、コゲラが留鳥である。コゲラは一般的であるが、他のキツツキは少ない。渡り鳥のアリスイの記録もある。

#### ⑰ スズメ目

スズメ目のなかの留鳥はヒバリ科のヒバリ。セキレイ科のキセキレイとセグロセキレイ。ヒヨドリ科のヒヨドリ。モズ科のモズ。カワガラス科のカワガラス。ミソサザイ科のミソサザイ。ヒタキ科ツグミ亜科のイソヒヨドリとトラツグミ、ヒタキ科ウグイス亜科のウグイスとセッカ。シジュウカラ科のコガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ。ゴジュウカラ科のゴジュウカラ。エナガ科のエナガ。メジロ科のメジロ。ホオジロ科のホオジロ、ホオアカ。アトリ科のカワラヒワ。ハタオリドリ科のスズメ。ムクドリ科のムクドリ。カラス科のカケス、ハシボソガラスそしてハシブトガラスがある。

上記の留鳥以外の鳥で、大隅地区に渡り鳥として渡来、または立ち寄るスズメ目の鳥を列記するとツバメ科のツバメ、イワツバメ。セキレイ科のツメナガセキレイ、ハクセキレイ、ビンズイ、ムネアカタヒバリ、タヒバリ。サンシヨウクイ科のサンシヨウクイ。レンジャク科のキレンジャク、ヒレンジャク。ミソサザイ科のミソサザイ。ヒタキ科のコマドリ、ノゴマ、コルリ、ルリビタキ、ジョウビタキ、ノビタキ、アカハラ、シロハラ、マミチャジナイ、ツグミ、ヤブサメ、オオヨシキリ、メボソムシクイ、センダイムシクイ、キクイタダキ、キビタキ、オジロビタキ、オオルリ、サメビタキ、エゾビタキ、コサメビタキ、サンコウチョウ。ツリスガラ科のツリスガラ。ホオジロ科のコホオアカ、カシラダカ、ミヤマホオジロ、ノジコ、アオジ、クロジ。アトリ科のアトリ、マヒワ、ウソ、コイカル、イカル、シメ。ハタオリドリ科のニューナイスズメ。ムクドリ科のコムクドリ。カラス科のコクマルガラス、ミヤマガラスがある。

### (3) 大隅地区における鳥類の生息状況の特徴

大隅地区の鳥類に関する特性はワシタカ類の渡りが第一にあげられる。特に秋の10月から11月にかけての渡りのシーズンになると、日本列島を南下してきたワシタカ類は大隅半島を縦断し佐多岬上空を通過し南西諸島へと渡っていく。大隅ブロック野鳥の会の岩元氏らによる長期間の観察例から、渡りでみられるワシタカ類はサシバ、ハチクマ、ツミ、ハイタカ、オオタカ、ケアシノスリ、オオノスリ、ハヤブサ、チゴハヤブサ、チョウゲンボウ、コチョウゲンボウ、オジロワシ、チュウヒ、ハイイロチュウヒ、アカハラダカ、カラフトワシ、ミサゴの17種がある。

最も多い種はサシバであるが、渡りの時期に、サシバと行動を共にして混群として渡る種と、サシバ等の群に混じらず単独で渡っていくというような特性がみられる。サシバの群れに混じり行動する種は、ハチクマ、ツミ、ハイタカがある。サシバの群に混じらず単独行動をとる種に、オオタカ、ノスリ類(ケアシノスリ、オオノスリ)、ハヤブサ類(ハヤブサ、チゴハヤブサ、チョウゲンボウ、コチョウゲンボウ)がある。また、留鳥とされるミサゴも少数であるがこの時期に南下する個体がみられる。

大隅地区は太平洋に面していることもあり、台風や前線等の気象異常でゲンカンドリ類やアジサシ類が飛来することもある。1996年6月25日にヤマシヨウビンが観察されている。また、1996年には鹿屋市近隣でナベヅルの15羽の群飛行が観察され、一羽単位であるが別個体とおもわれる

ナベヅルが大隅地区の数カ所ですら観察された。

レッドデータブックの希少種に掲載されている種のなかで繁殖が確認されているものもあり、志布志湾沿岸で800羽というコアジサシの繁殖コロニー、鹿屋市の自衛隊基地内ではツバメチドリの繁殖が特記すべきものであり、その他にミサゴ、チュウサギの繁殖もみられる。

謝辞：大隅地区での野鳥チェックリスト並びにレッドデータブック記載の重要種についての詳細な資料提供をいただいた、岩元幸生氏・牧尾美由紀氏をはじめ、大隅ブロック野鳥の会会員の皆様に心から感謝する。

#### 参考（引用）文献

- 文化庁（1975）.天然記念物緊急調査植物図・主要動物地図.143p.鹿児島県. 国土地理協会.東京  
岩元幸生(1997). 大隅地区 野鳥チェックリスト. 大隅ブロック野鳥の会. 鮫島私信  
鹿児島県（1975）. 鹿児島県の野鳥. 鹿児島県環境局環境保全課  
鹿児島県（1987）. 鹿児島県の野鳥. 鹿児島県保健環境部環境管理課  
環境庁（1981）. 日本産鳥類の繁殖分布. 大蔵省印刷局. 東京  
環境庁（1991）. 日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—. 日本野生生物研究センター. 東京  
日本鳥学会（1974）. 日本鳥類目録. 学習研究社. 東京  
大隅ブロック野鳥の会（1992—1996）. サシバ NO.1 —NO.12. 大隅ブロック会報  
高野伸二（1982）. フィールドガイド—日本の野鳥. 日本野鳥の会. 東京

表 1. 大隅地区で確認される鳥類（大隅ブロック野鳥の会資料）

| 目・科・種  |
|--|
| カイツブリ目   |
| カイツブリ科   |
| カイツブリ, ハジロカイツブリ, ミミカイツブリ, アカエリカイツブリ, カンムリカイツブリ |
| ミズナギドリ目  |
| ミズナギドリ科  |
| オオミズナギドリ, ハシボソミズナギドリ                           |
| ペリカン目  |
| カツオドリ科   |
| カツオドリ  |
| ウ科   |
| カワウ, ウミウ                                       |
| ゲンカンドリ科  |
| オオゲンカンドリ, コゲンカンドリ                              |

コウノトリ目

サギ科

ヨシゴイ、ミゾゴイ、ゴイサギ、ササゴイ、アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギ

トキ科

ヘラサギ、クロツラヘラサギ

カモ目

カモ科

コハクチョウ、ツクシガモ、オシドリ、マガモ、カルガモ、コガモ、トモエガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、シマアジ、ハシビロガモ、ホシハジロ、アカハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ウミアイサ、カワアイサ

タカ目

タカ科

ミサゴ、ハチクマ、トビ、オジロワシ、オオタカ、アカハラダカ、ツミ、ハイタカ、ケアシノスリ、オオノスリ、ノスリ、サシバ、クマタカ、カラフトワシ、チュウヒ

ハヤブサ科

ハヤブサ、チゴハヤブサ、コチョウゲンボウ、チョウゲンボウ

キジ目

キジ科

ウズラ、コジュケイ、ヤマドリ、キジ

ツル目

クイナ科

クイナ、ヒクイナ、バン、ツルクイナ、オオバン

チドリ目

チドリ科

ハジロコチドリ、コチドリ、イカルチドリ、シロチドリ、メダイチドリ、ムナグロ、ダイゼン、ケリ、タゲリ

シギ科

キョウジョシギ、トウネン、ハマシギ、オバシギ、ミユビシギ、ヘラシギ、アオアシシギ、クサシギ、タカブシギ、キアシシギ、イソシギ、ソリハシシギ、ダイシャクシギ、ホウロクシギ、チュウシャクシギ、ヤマシギ、タシギ、アオシギ

セイタカシギ科

セイタカシギ

ツバメチドリ科

ツバメチドリ

カモメ科

ユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、カモメ、ウミネコ、ズグロカモメ、ハジロクロハラアジサシ、クロアジサシ、アジサシ、ベニアジサシ、エリグロアジサシ、コアジサシ

ハト目



ハト科  
キジバト, アオバト

ホトトギス目  
ホトトギス科  
ジュウイチ, カッコウ, ツツドリ, ホトトギス

フクロウ目  
フクロウ科  
コミミズク, コノハズク, オオコノハズク, アオバズク, フクロウ

ヨタカ目  
ヨタカ科  
ヨタカ

アマツバメ目  
アマツバメ科  
ハリオアマツバメ, ヒメアマツバメ, アマツバメ

ブッポウソウ目  
カワセミ科  
ヤマセミ, ヤマショウビン, アカショウビン, カワセミ

キツツキ目  
キツツキ科  
アリスイ, アオゲラ, オオアカゲラ, コゲラ

スズメ目  
ヒバリ科  
コヒバリ, ヒバリ

ツバメ科  
ツバメ, イワツバメ

セキレイ科  
ツメナガセキレイ, キセキレイ, ハクセキレイ, セグロセキレイ, ビンズイ, ムネアカタ  
ヒバリ, タヒバリ

サンショウクイ科  
サンショウクイ

ヒヨドリ科  
ヒヨドリ

モズ科  
チゴモズ, モズ, アカモズ, オオカラモズ

レンジャク科  
キレンジャク, ヒレンジャク

カワガラス科  
カワガラス

ミソサザイ科  
ミソサザイ

## ヒタキ科

コマドリ、コルリ、ルリビタキ、ジョウビタキ、ノビタキ、イソヒヨドリ、トラツグミ、アカハラ、シロハラ、マミチャジナイ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、オオヨシキリ、メボソムシクイ、センダイムシクイ、キクイタダキ、セッカ、キビタキ、オジロビタキ、オオルリ、サメビタキ、エゾビタキ、コサメビタキ、サンコウチョウ

## エナガ科

エナガ

## ツリスガラ科

ツリスガラ

## シジュウカラ科

コガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ

## ゴジュウカラ科

ゴジュウカラ

## メジロ科

メジロ

## ホオジロ科

ホオジロ、ホオアカ、コホオアカ、カシラダカ、ミヤマホオジロ、ノジコ、アオジ、クロジ

## アトリ科

アトリ、カワラヒワ、マヒワ、ウソ、コイカル、イカル、シメ

## ハタオリドリ科

ニューナイスズメ、スズメ

## ムクドリ科

コムクドリ、ムクドリ

## カラス科

カケス、コクマルガラス、ミヤマガラス、ハシボソガラス、ハシブトガラス

---

(執筆者：鮫島正道)

## 10 大隅の哺乳類相

### (1) 大隅の哺乳類の概要

哺乳類はそれぞれの習性から森林から平野部や耕作地などの環境を選び、それに適応しながら生きている。

哺乳類の中で大隅地区だけに生息するというような固有の種はなく、また、環境庁の編纂した「レッドデータブック」(日本の絶滅のおそれのある野生生物)の掲載種もない。しかし、稲尾岳はヤマネの生息の南限である。

大隅の哺乳類相に関しては環境庁(1993)により、鹿児島県内の生息種について概要をつかむことが出来る。本報告では肝属川水系の哺乳類相については、筆者らによる建設省(1994)の報告と鹿児島県立博物館の自然調査(1996)の結果をもとに記述する。

今回の調査対象市町村は、曾於郡の大隅町、輝北町、財部町、末吉町、松山町、志布志町、有明町、大崎町の8町。肝属郡の垂水市、鹿屋市、串良町、東串良町、内之浦町、高山町、吾平町、大根占町、根占町、田代町、佐多町の2市9町である。

### (2) 哺乳類相の概説

日本の哺乳類の分布状況は両生類・爬虫類と似ているが、移動能力や環境適応に限界があり、地域を限って生息・分布する種も多い。

哺乳類は種類数も少なく、生息数も少ない。また、夜行性ということもあり、あまり目立たない存在である。

現在、大隅に生息するとされる哺乳類にはジネズミ、ヒミズ、コウベモグラ、キクガシラコウモリ、コキクガシラコウモリ、ノレンコウモリ、アブラコウモリ、ニホンユビナガコウモリ、ニホンザル、ノウサギ、ムササビ、ヤマネ、アカネズミ、ヒメネズミ、カヤネズミ、ハツカネズミ、クマネズミ、ドブネズミ、タヌキ、キツネ、テン、イタチ、アナグマ、ニホンイノシシ、ニホンジカがあげられる。

今回は分類段階の目のグループごとに、既存の関係資料と文献を参考にし、一部に筆者の知見を加え、鹿児島県の大隅の哺乳類相について概説する。

#### ① モグラ目(食虫目)

##### a. ジネズミ(サイゴクジネズミ)

ジネズミはトガリネズミ科に属し、本県産のジネズミは亜種としてサイゴクジネズミとして分類される。鹿児島県ではほとんど全域に分布し、大隅地区でも普通にみられる。住宅街をはじめ、河畔、水辺、農耕地周辺のヤブ、低山帯の低木林などに生息し、小型昆虫類やクモ類、ムカデなども捕食する。特に廃材を積み上げたりしている場所や、大型のゴミを長期間放置した場所の周辺に多い。

3~4頭の仔を産み、寿命は1年余りと考えられる。

##### b. ヒミズ

ヒミズはモグラ科に属する小型のモグラで、モグラと比較して前肢は極端に貧弱である。鹿児島県ではほとんど全域に分布し、大隅地区でも普通にみられる。

通常底山帯の草原、低木林に多くみられ、特に、落ち葉が積もった場所等を好み、半地下

性の生活をしている。筆者らの哺乳類トラップ調査時に、地表面に設置したネズミのトラップに2頭がかかったことがある。このことから、地表面にも出現することがわかる。集落内でもみられ、ネコにしばしば捕らわれることがある。小型昆虫類やミミズ、クモ類、ムカデ類、植物種子などを採食する。

春に1回繁殖し、2～5頭の仔を産み、寿命は3年余りである。

#### c. コウベモグラ

コウベモグラはモグラ科に属する。前肢はショベル状になり頑丈に出来ている。鹿児島県ではほとんど全域に分布し、大隅地区でも普通にみられる。

生息環境は低地の草原や、農耕地から山地の森林にまで分布する。今回の1996年夏の稲尾岳の調査では、稲尾岳(959)の頂上付近や稜線で多くのモグラトンネル、モグラ塚がみられた。一般的には湿潤で、土壌の深い平野部で最も生息密度が高い。肝属川の河川敷のいたる所に、モグラ塚やモグラトンネルのフィールドサインがみられる。

食性は昆虫類とミミズ類を主に捕食するが、ムカデ類、ヒル類、植物種子なども採食する。通常春に1回繁殖し、2～6頭の仔を産み、寿命は6年余りである。

### ② コウモリ目 (翼手目)

コウモリ類は環境庁(1993)によれば、大隅地区にはキクガシラコウモリ、コキクガシラコウモリ、ノレンコウモリ、アブラコウモリ、ニホンユビナガコウモリが生息しているようである。この中で最も一般的なキクガシラコウモリ、コキクガシラコウモリ、アブラコウモリについて記述する。

#### a. キクガシラコウモリ

キクガシラコウモリはキクガシラコウモリ科に属している。前腕長56～65mm、頭胴長63～82mm、尾長28～45mm、体重17～35g、褐色系の体毛をもつ。鹿児島県ではほとんど全域に分布していて、大隅地区でも普通にみられる。また、コキクガシラコウモリと同じように、洞穴内で最も一般的なコウモリの一つである。

昼間は洞穴で50～数百頭の大きな集団で休息することが知られている。鹿児島県内、および大隅地区の場合、シラス台地に掘られた防空壕後や空き家、岩の割れ目の穴などに2～5頭程度の小集団でみられる事が多い。採餌は夜であるが、おもに洞から飛び立ってから2時間の間に集中されることが判っている。河川、平地、小丘陵、森林、草原などが餌場である。

初夏に1仔を産む。寿命は長く、20年以上生存する個体も知られている。

#### b. コキクガシラコウモリ

コキクガシラコウモリはキクガシラコウモリ科に属している。前腕長36～44mm、頭胴長35～50mm、尾長16～26mm、体重4.5～9g、褐色系の体毛をもつ。鹿児島県ではほとんど全域に分布し、大隅地区でも普通にみられる。また、キクガシラコウモリと同じように、洞穴内で最も一般的なコウモリの一つである。

昼間は洞穴で百頭を越える大きな集団で休息することが知られている。鹿児島県内、および大隅地区の場合、シラス台地に掘られた防空壕後や空き家、岩の割れ目の穴などに2～5頭程度の小集団でみられる事が多い。採餌は夜であるが、おもに洞から飛び立ってから2時間の間に集中されることが判っている。河川では水面近く、小丘陵地帯では地表面近くの場所での採餌が観察されている。

夏に1仔を産む。晩秋に冬眠に入り、初春に目覚め活動をすると思われるが、鹿児島県内の

場合、冬季の洞穴内の冬眠状態を日を変えて観察したが、日によりいなくなったり、ぶら下がった場所が大きく変わっていたりしており、冬でも暖かい日には行動していることが推察される。

#### c. アブラコウモリ

アブラコウモリはヒナコウモリ科に属している。前腕長30~37mm、頭胴長41~60mm、尾長29~45mm、体重5~10g、黒褐色、暗灰褐色系の体毛をもつ。鹿児島県ではほとんど全域に分布し、大隅地区でも普通にみられる。

昼間の隠れ家は家屋で、数頭から、多いものになると100頭の個体が集団をつくることも知られている。飛翔している昆虫を捕食、日没後2時間ぐらいで満腹になるようであるが、隠れ家に帰るのは日の出前といわれている。

初夏に1~3仔を産む。寿命は雌で5年、雄で3年ということが知られている。

### ③ サル目 (霊長目)

#### a. ニホンザル

ニホンザルはオナガザル科に属している。雄のほうが大きく、頭胴長53~60cm、尾長8~12cm、体重10~18kg、雌は頭胴長47~55cm、尾長7~10cm、体重8~16kgである。毛の色は茶褐色ないしは灰褐色で、腹と手足の内側はやや白い。

昼行性で、主に常緑広葉樹林、落葉広葉樹林に生息し、数頭の雄生体ことが知られている。鹿児島県内では薩摩半島にやや空白がみられるが、大隅地区では多い。特に高隈山系の高隈山や肝付山系の稲尾岳周辺に多く、佐多町、内之浦町の太平洋岸に面した常緑広葉樹林を通る県道などには、サルの糞が多数確認できる。

食性は雑食性であるが量的には植物性が多い。出産期は春から夏で、普通1仔を産む。

### ④ ウサギ目

#### a. ノウサギ (キュウシュウノウサギ)

鹿児島県内に生息するノウサギはウサギ科ノウサギで、さらに亜種としてキュウシュウノウサギに分類される。頭胴長43~54cm、尾長2~5cm、耳長6~8cm、後足長12.2~16.5cm、体重1.3~2.5kgである。毛の色は腹が白色である以外ほぼ全身茶褐色で、耳の先端が黒い。

夜行性で、巣はつくらない。鹿児島県ではほとんど全域に分布し、大隅地区でも普通にみられる。森林、草原、耕作地など様々な環境にみられるが、低山から山地帯に多い。植物食性で、多くの植物の葉、芽、枝、樹皮を採食する。林業・農業にとっては、害をおよぼすこともある。

早春から秋まで連続して数回の出産を繰り返すといわれ、ふつう2仔が多い。

### ⑤ ネズミ目 (げっ歯目)

#### a. ムササビ

ムササビはリス科に属している。頭胴長27~49cm、尾長28~41cm、体重700~1500gである。最大の形態の特徴は皮膜という特殊な膜が、首から前肢・後肢・尾の間に発達する。一般的に背面は褐色系で、腹面は白い。

低地から亜高山帯までの天然林、発達した二次林などに生息する。鹿児島県ではほとんど全域に分布し、大隅地区でも普通にみられる。夜行性で樹上活動が主である。巣は大木の樹洞につくる。食性は植物食で木の芽や花、果実、木の実を採食する

冬と初夏に交尾し、春と秋に出産する。通常2仔が多い。

b. ヤマネ

ヤマネはヤマネ科に属している。頭胴長68～84mm，尾長44～54mm，後足長16～17mm，体重は夏は14～20gである。冬眠前に体重は約二倍に増加することがわかっている。国の天然記念物に指定されている動物であり，また，冬眠をする動物としても有名である。

鹿児島県では北薩の国見山系，霧島山系と大隅地区の高隈山系，肝付山系で，山地帯から亜高山帯の成熟した森林に生息する。夜行性で，おもに樹上で生活する。果実，種子を食べるが，昆虫，小鳥の卵，小動物なども食べることが観察されている。

春に出産するが，一部の個体は秋に出産することもある。通常3～5仔が多い。

c. アカネズミ

アカネズミはネズミ科に属している。頭胴長80～140mm，尾長70～130mm，後足長22～26mm，体重は20～60gである。背面は褐色から橙褐色で腹面は白色である。

鹿児島県ではほとんど全域に分布していて，大隅地区でも普通にみられる。低地から高山帯まで広く分布し，森林にも生息するが，河川敷の藪や草地に数多くみられる。大隅地区の一級河川である肝属川の上流から河口までの全地区で，トラップ調査によって確認され，最も多い野鼠である。

植物食で，植物の根茎部，木の実，種子などを主に食べるが，昆虫も食べる。秋から春にかけて出産する。通常3～8仔である。

d. ヒメネズミ

ヒメネズミはネズミ科に属している。頭胴長65～100mm，尾長70～110mm，後足長18～21mm，体重は10～20gである。胴の長さより尾の長さがやや勝っている（尾長率100%以上）。背面は栗色で腹面は白色である。

鹿児島県ではほとんど全域に分布していて，大隅地区でも普通にみられる。低地から高山帯まで広く分布し，極相林の特徴である落ち葉や枯れ枝が厚く積もった環境を好み，木登りが上手で半樹上生活をする。

おもに種子，果実，地面を這う虫なども食べる。秋から春にかけて出産する。通常4仔ぐらいである。

e. カヤネズミ

カヤネズミはネズミ科に属している。頭胴長50～80mm，尾長61～83mm，後足長14～16mm，体重は7～14gである。

鹿児島県ではほとんど全域に分布し，大隅地区でも普通にみられる。通常，低地の草地，水田，畑，休耕地，沼沢地などに生えたイネ科の植物が密生したところに多く見られる。小鳥が作るような球形の巣を地上高くに作る習性をもっている。肝属川の河川敷内の草地で多く見かける。春と秋に出産する。通常2～8仔が多い。

f. ハツカネズミ

ハツカネズミはネズミ科に属している。汎世界的分布の種である。頭胴長57～91mm，尾長42～80mm，後足長13～17mm，体重は9～23gである。

鹿児島県ではほとんど全域に分布し，大隅地区でも普通にみられる。通常，家屋，水田，畑，河川敷，荒地，砂丘地などに生息している。野草から栽培した野菜や昆虫などを捕食する。

春と秋に明瞭な繁殖期をもつ。通常5仔前後が多い。

g. クマネズミ

クマネズミはネズミ科に属している。汎世界的分布の種である。頭胴長 150~240mm, 尾長150~260mm, 後足長22~35mm, 体重は150~200 gで, 尾長は頭胴長よりやや長い傾向がある。

鹿児島県ではほとんど全域に分布し, 大隅地区でも普通にみられる。通常, 家屋の天井裏など比較的乾燥した所に生活している。食物は種・実などの植物質が多く, 動物質の餌の比率は少ない。

夏が繁殖期で, 胎児数は2~10, 平均5仔ぐらいが多い。

h. ドブネズミ

ドブネズミはネズミ科に属している。汎世界的分布の種である。頭胴長110~280mm, 尾長175~220mm, 後足長27~42mm, 体重は40~500 gで, 尾長は頭胴長よりやや短い傾向がある。

鹿児島県ではほとんど全域に分布し, 大隅地区でも普通にみられる。主に下水, 台所の流し, ごみ捨て場など比較的湿った場所を好む。食物は動物質の餌を比較的多く食べる。

春から夏が繁殖期で, 胎児数は1~18, 平均8仔ぐらいが多い。

⑥ ネコ目 (食肉目)

a. タヌキ

タヌキはイヌ科に属している。北海道から九州まで広く生息している。頭胴長50~60cm, 尾長15cm, 体重は3~5 kgである。

鹿児島県ではほとんど全域に分布し, 大隅地区でも普通にみられる。住宅地周辺から山地まで広く生息している。食物は鳥類, 野鼠, 昆虫, 野生果実類などを採食する。排泄物を特定の場所に集中させる「タメ糞」の習性がある。

春に3~5頭を出産する。秋まで家族群で生活する。

b. キツネ

キツネはイヌ科に属している。北海道から九州まで広く生息している。頭胴長60~75cm, 尾長40cm, 体重は4~7 kgである。

鹿児島県では生息範囲が減少してきており, 大隅地区で稀に見かけるだけになった。主に山地に生息している。食物は鳥類, 野鼠, 昆虫, 野生果実類なども採食する。

春に平均4頭を巣穴の中で出産する。夏まで家族群で生活する。

c. テン

テンはイタチ科に属している。本州から九州まで広く生息している。頭胴長45cm, 尾長19cm, 体重は1~1.5kgである。耳介がイタチよりハッキリと確認出来る。

鹿児島県ではほとんど全域に分布し, 大隅地区でも普通にみられる。樹上空間を利用することが多く, 森林を生息地とする。食物は鳥類, 野鼠, 両生類, 爬虫類, 昆虫, 野生果実類なども採食する。

初夏に樹洞などに簡単な巣を作り, 2~4頭の仔を産む。

d. イタチ

イタチはイタチ科に属している。本州から九州まで広く生息している。頭胴長は雄で27~37cm, 雌で16~25cm, 尾長は雄で12~16cm, 雌7~9cm, 雄と雌の体型の差が極端である。

鹿児島県ではほとんど全域に分布していて, 大隅地区でも普通にみられる。土穴などを巣とする。食物はカエル類, 鳥類, 野鼠, 昆虫, カニなども採食する。

平均3～5頭の仔を産む。

e. アナグマ

アナグマはイタチ科に属している。本州から九州まで広く生息している。頭胴長51cm, 尾長14cm, 体重は2kg程度である。

鹿児島県ではほとんど全域に分布し、大隅地区でも普通にみられる。住宅地周辺から山地まで広く生息している。トンネルを掘り、集団で生活する。食物は土壤動物や小動物をおもに捕食し、野生果実類なども採食する。

春に3～5頭を出産する。秋まで家族群で生活する。

⑦ ウシ目(偶蹄目)

a. イノシシ

イノシシはイノシシ科に属している。本州から九州まで分布するが、積雪日数が70日を越える東北・北陸地方などには分布しない。雄で頭胴長110～160cm, 体重は50～150kg程度で、性的二型が認められ、雌の体のサイズは雄より小さい。

鹿児島県ではほとんど全域に分布し、大隅地区でも普通にみられる。常緑広葉樹林、落葉広葉樹林、里山の二次林、低山帯と隣接する水田、農耕地、平野部に広く分布する。食性は雑食性で植物質・動物質と、なんでも食べる。

出産期は春から秋で、平均5頭ぐらいを出産する。

b. ニホンジカ(キュウシュウジカ)

ニホンジカはシカ科に属している。北海道から九州まで分布する。九州産のシカはキュウシュウジカの亜種に分類されている。頭胴長は雄で90～190cm, 雌で90～150cm。体重は雄で50～130kg, 雌で25～80kgである。

鹿児島県では北部の北薩地区や霧島地区に多い。大隅地区にも多少ではあるが生息している。主に常緑広葉樹林、落葉広葉樹林に生息し、森林から完全に離れて生活することはない。パッチ状に草地が入り込んだ森林地帯に多く生息する。食性は下生えの木の葉が主である。

出産期は5月下旬～7月上旬で、通常1仔を産む。

参考(引用)文献

- 阿部 永(1994).日本の哺乳類.東海大学出版会.東京  
朝日 稔(1977).日本の哺乳動物.玉川大学出版部.東京  
朝日 稔・川道武男(1991).現代の哺乳類学.朝倉書店.東京  
今泉吉典(1960).原色日本哺乳類図鑑.保育社.大阪  
鹿児島県(1989).鹿児島県のすぐれた自然.145-153.鹿児島県保健環境部環境管理課  
環境庁(1991).日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-.日本野生生物センター.東京  
環境庁(1993).日本産野生生物目録-本邦産野生動植物の種の現状-脊椎動物編.財団法人自然環境研究センター.東京  
建設省(1994).河川水辺の国勢調査(両生類・爬虫類・哺乳類)・肝属川水系.建設省河川局治水課  
安間繁樹(1982).アニマル・ウォッチング.晶文社.東京

(執筆: 鮫島正道)